

■ 書 評



精神鑑定への誘い —精神鑑定を行う人のために、 精神鑑定を学びたい人のために—

安藤久美子 著
星和書店
2016年6月 208頁
本体価格 2,200円＋税

「一般に、精神医学はわかりにくいといわれます。わかりにくいところがあってこそ真実かもしれません。わかりにくいことを承知の上で、平易な言葉で十分に説明を尽くすのが鑑定書のもっとも大切な原則の一つです」(本書「精神鑑定の実施方法」からの一文)

昨今の事件のすべてではないが、時に精神障害が関係する事件の報道に接することがあり、市井の精神科医が鑑定に専門であるはずもないのに、一般市民から質問を受けることもある。また「事件と精神症状との関連性」について行政的な意見を求められることもあり、自分の受け持ち患者のことで警察に調書をとられることもある。職場の同輩・先輩が本格的な精神鑑定業務に取り組む姿を見て、興味関心がありつつも、同時に並々ならぬ近寄りがたさも感じていて、他人事と傍から眺めていたわが身であったが、思うところがあり本書を手にとった。

冒頭に近い部分で、一般的な精神医療の中の鑑定のイメージは「膨大な時間と労力を要し、報酬が不十分で学業的な業績にもならず、難しく……」と列挙し、それに対して精神鑑定から得られる臨床的な魅力が述べられ、タイトル通りこの世界に誘われた後に、非常に具体的な鑑定の方法論が学べるという構成になっている。

まるで小説を読むよう、という帯の表現に偽りなく、語るような文体は非常にわかりやすく、惹き込まれるが、中身は小説的ではなく、実際の心理検査所見などの図表が豊富で、第3章「精神鑑定を始める前に」以降は、鑑定の依頼があって、加害者や家族との面接

をし、各種検査を実施し、鑑定書を作成し、法廷での鑑定人尋問(裁判長へのプレゼンテーション)の実際について、明確に綴られており、確かに一通り本書を読めば「にわか鑑定医」になれそうな、優れた臨床マニュアルでもある。司法精神医学の専門でないと、精神科医でもクリアカットに理解しにくい医療観察法と精神保健福祉法の違いについても、専門家ならではの明快な解説がなされており、知識の整理に役立つ。臨床家として手に取るのに容易な本の厚さと価格帯であるが、エッセイ的な臨床的な読み物とは一線を画した一冊である。

筆者が小児の鑑定が専門で心理検査にも精通しているため、この領域の記載は比較的多いのが、本書の特徴であり、癖の出ている部分と感じられたが、鑑定以外の場面でも頻用される心理検査が簡潔に説明されており、ありがたかった。

本書のテーマは精神鑑定の啓発と概念と実際の方法論であるが、司法精神医学以外の精神医学一般臨床においても必要で有益な、精神科診断学としても多くの教示がなされていると感じた。裁判員を前にして、鑑定結果を説明するための技術・注意点は、病状説明のインフォームド・コンセントに通じ、比較的多くの頁が割かれ、筆者が重視している「鑑定の断り方」の部分で論じていることは、精神科医として、当事者へ責任を持った診療をするための心構えを論じることと同義であると考えられた。

個人情報マスクされ、部分的に紹介された筆者がかかわった「症例」の記載も、犯罪と病い・悩みとの関連性が、対話によって、もつれた状態から徐々に明らかになって当事者、面接者双方の心境の変化が見られ、いつか集結する過程は、障害を持つ人によりそう精神医療そのもので、鑑定を通して誠実に「人」に向き合う著者の姿勢に、われわれがあるべき姿が示されていると感じられた。

一気に読み終えたあと、重い話題の本であったはずが、魅力ある誘いのおかげで、帯にある「精神鑑定をお願いします」と突然、電話が裁判所からかかってこないかと、期待してしまうような不謹慎な感想が浮かんだ。

(今村弥生)